

道を切り開いた

先達たち



日本初の女性博士保井コノ



ジェンダー研究センター 研究協力員

三木 壽子

保井コノは1880年香川県大内郡三本松村で生まれた。1898年女子高等師範学校（現お茶の水女子大学、略して東京女高師）に新設された理科に進学。卒業後、コノは岐阜県立高等女学校の理科の教員として赴任。3年間の教師生活を終えると、かねてから興味を持っていた実験心理学の研究準備のために生物学を学ぼうと考え、1905年母校に研究科が新設されると、定員1名の理科に入学。岩川友太郎教授の指導を受けた。コノは翌年には最初の論文「鯉のウェーベル氏器官について」を動物学雑誌に発表している。これはわが国女性科学者初の科学論文である。岩川はコノにヒルの卵の発生の研究を進めたが、動物を扱うのが嫌で、同じ発生学を植物のさんせいというもを用いて試み、1911年「さんせいもの生活史」という題でイギリスの植物学雑誌Annals of Botanyに発表。日本女性が外国雑誌に発表した最初の科学論文である。東京大学農学部の三宅教授は保井の留学先として、ドイツのストラスブルガー教授を推薦した。彼は保井を研究室に招くため机まで用意してくれ、女高師側も後押ししたが、政府からは留学の許可は下りなかった。文部省側に科学の分野で女子を留学させても大成しないのではないかという考えがあったのである。保井の留学が頓



挫したままなのを知った藤井健次郎氏の後押しにより、やっと留学の許可が下りたのは、1914年のこと。しかしながら、これには結婚しないで生涯研究を続けるという暗黙の制約があり、留学の条件に理

科研究の他に家事研究の言葉が付け加えられていた。そしてこの時には、ストラスブルガー教授はすでに他界し、しかも第一次大戦が勃発、渡欧は断念せざるを得ない状況であった。そのためアメリカのシカゴ大学のチェンバレン、コースター両博士の下に行き細胞学の研究を開始した。続いて石炭の新研究を始めたハーバード大学のジェフリー教授のもとに移る。ジェフリーは世界の石炭の中で日本と満州は残しておくから、帰国しても研究するようにと勧めた。これが保井の学位論文となるのである。

1916年帰国した保井は東京大学の藤井健次郎の指導を受けることになる。勤務先である東京女高師には保井の研究に必要な機器や薬品を購入する研究費がつかずなかったためである。保井は早速ジェフリー教授の言葉に従い、愛知、岐阜地区の石炭を調べ、形成する化石植物がセコイアに酷似していることを発見。更に、セコイアが松に似た先祖に由来するという従来の仮説を確認している。そして、日本各地の石炭を採集するため、東奔西走。採集の時、保井は自ら「もっこ」に乗って地下の坑道まで降りて行き、坑夫に直接あれが欲しいこれが欲しいと頼んだ。坑夫もこんな所にまで女性が降りて来たと驚き、とても親切にしてくれたという。1923年、関東大震災があったが、その中で石炭の研究は「日本産石炭の植物学的研究」としてまとめられ東京帝国大学より理学博士が授与された（1927）。このとき保井は46歳、女性博士第一号となった。

1918年東京帝国大学理学部植物学科に遺伝学講座が創設され、藤井が担当教授となり、保井は1917年より1939年まで東大植物学教室の嘱託となって実験を担当した。1929年、藤井を主幹として世界的に権威のある細胞学の雑誌「キトロギア」が創刊された。女高師と東大での授業、さらに自分の研究に明け暮れる日々の中で、保井は藤井や篠遠喜人、和田文吾、田中信徳らを助けて病に倒れるまで、編集、印刷、庶務会計に携わり、毎年のように自分も論文を掲載していた。石炭研究のあと、保井は遺伝学、細胞学を研究し、広島に原爆が投下された時はすぐに被爆したムラサキツクサを採集し、放射性物質が植物に与える影響について報告している。

1949年新しい学制が敷かれることになり、保井は東京女高師を女子の国立大学として存続させる為、あちらこちらに陳情に出向き、猛運動を展開した。また、保井はいろいろな研究会や講演会によく出席した。「よく出席されますね」といわれると、新しいことを学びたいからと答えている。1955年紫綬褒章、1965年勲三等宝冠章を授与され、従三位に叙せられた。